特　集

第7回

京都建築賞に向けて

意見交換会
前　編

■審査委員

委員長　竹山　聖（京都大学 教授）

井上章一
（国際日本文化研究センター　教授）

永山祐子（永山祐子建築設計 主宰）

■顕彰制度特別委員会

髙木伸人・髙橋　勝・橋本政樹

原　利行・佐久間譲・藤原　出

第７回となる京都建築賞に向けて、去る９月19日に新たな審査委員と意見交換を行った。その概要を２回にわたりお届けします。

「京都だから」？

【髙木】先ず、京都というものをどう考えているか、見ているか、というあたりからお話し頂ければと思います。井上さんは『京都ぎらい』という本をお書きになっていますが、京都の姿形をどういう風に受け止められています？

【井上】例えば、中村外二さんなどの仕事とかは対象に入らないのかな？そうでもない？

【髙木】そういう意味では、「いわゆる京都」のような表面的な話はやめようという考えはありましたね。

【井上】そもそも棟梁達はエントリーをしてこないだろうと？

【髙木】挑まれるかも知れませんね。そこはわからないです。若い人達の方が、「いわゆる京都」で建築する事が多いように思います。

【井上】瓦や勾配屋根をのっけたマンションみたいなのですか？

【髙木】ええ、「そうしといたらええやん」みたいな。そこに瓦や勾配屋根の必然性は無く、言われているからそうしました、みたいな。

竹山　聖 氏

【井上】別の話やけど、景観制度を嫌がる建築家が多いので、この制度は京都の設計事務所の利益を守る非関税障壁になっているんだという風に言ってはる方がいらっしゃいました。役所との面倒くさいやり取りに慣れているのは、やっぱり京都の設計士さんやし、他所の設計士は京都のややこしい注文嫌がるから。

【髙橋】確かに面倒くさい。慣れていないとできないですね。

【髙木】だけど、世界的にはこうした制度は当たり前で、面倒くさいのは京都に限ってということはないですよね。

【井上】フィレンツェとかやったら建築賞自体ありえないでしょう。新築物件が無いんやから。

【髙木】いやいや、この賞は何でもありですよ、新築に限らない。リフォームだけ、内装だけでもいいんですから。竹山さんは、こうした「京都だから」のような事は？

【竹山】30年前の話ですが、箱根で「強羅花壇」を設計したとき、国立公園の「普通地域」でしたが、かなりうるさいこと言われました。驚いたのは「屋根が赤いのは良い、でも壁が白いのはだめ」。びっくりでしょ?! 壁を白にしちゃだめなんですよ。スイスの赤い屋根の風景を下敷きにして決めたという話も漏れ聞きましたが、そもそも日本とは違いますね。漆喰調の長い壁面があるのですが、これも申請図面に白と書いていくとだめだという。灰白色という文言で乗り切りました。120メートルの列柱廊も「渡り廊下」という解釈をしたり、いろいろあって・・・6ヶ月かかりましたけどね、何とか認めてもらいました。

【髙木】その基準が何を言わんとしているのかということを分からない、分かろうともしない・・・。

【竹山】京都の景観にしても庇さえ出ていればいい、という短絡的な考え方があります。嵐山のような景観を重視すべき場所についても、「和風感」などという日本語にもなっていない文言を入れた指針を書くべきではないでしょう。文言は重要です。まして行政の担当者が文言にもないことを指導して、おれが法律だ、などという言葉を吐くのはもってのほかです。

庇の話に戻りますが、たとえば烏丸通や御池通のような表通りに面した高層の建物に対して、庇をつけりゃいいってわけではないでしょう。付け庇など不正直なデザインとして忌み嫌われていた時代もありました。

【井上】この近くに、安藤忠雄さんのでも庇の付いたのがあるやん。あれは、安藤さんも敗北しはったってこと？

【竹山】三条通を少し上がったところのやつね。あれは、なかなか良いですよ。金属で、とにかくピシっと出して。あれは安藤さんも折り合いをつけはった、大人になったっていうか。若い時なんか、伊豆の国立公園の中のプロジェクトの模型見せてもらいましたが、なんで屋根なんか付けなあかんねん言うて全部フラットルーフやった。

【髙木】折り合いをつけたと言っても、安藤さんらしいと言うか、あの屋根は大きなパーツで構成されていて、瓦や他の金属板とは全く違う表情をしていますよね。

京都って、よく見たら破格のものが他にもたくさんありませんか？

変容していく都市、景観の中で今の時代を見て判断する

【竹山】 このあいだヴィエンナーレの関係でベネチアに行ってきたけど、ベネチアは16世紀のパラディオが造ったあたりが最後で新しいものはできていない。パラディオのサン・ジョルジョ・マッジョーレ教会やイル・レデントーレ教会などの真っ白いファサードはいまやベネチアの顔です。建築当初は周りからすごく浮いたと思うけど、今や景観に馴染んでいる。

ベネチアの最盛期は14～15世紀くらいまで。1453年のコンスタンチノープル陥落以降、ビザンチン帝国の威光が無くなって、それからオーストリアの傘下に入ったりして衰えかけたときにパラディオが上記の教会群を造って、今のベネチアの景観が完成された。その後、都市は歴史的に言って、経済都市は文化都市として生き延びるわけです。京都も同じだよね。

16世紀のパラディオの例に見るように、京都建築賞は、現時点で我々の判断基準によって、未来の都市景観を見据えながら、見通すことはできないにしても、ともかく「これは良い」とジャッジするしかないんだと思う。200年後には、また違った判断基準があるはず。パラディオが教会を造った時、最初から受け入れられたかわからないけど、それでも、その仕事を通して後のヨーロッパに大きな影響を与える建築を造った。そんなふうに局所に普遍を見るまなざしが大切でしょう。

街の景観とファサード、オーナメント（装飾）について思うこと

【竹山】 パラディオは中に入るとシンプルです。ただファサードは壮麗。やっぱり景観ではファサードが問題になると思うし、コンテクストを読んでいろんな事を考えないといけないのが都市の建築。だけど、そのために無駄なオーナメントをくっつけているのはあんまり好きじゃない、とだけ言っておきます（笑）。

法律は完璧なものではないけれども、ルールの中で皆生きていかなければならない。でも赤信号の向こうで死にかけている人がいる場合もある。そのせめぎ合いの中で出された判断が果たしてどうなるか。いろいろなバックグラウンドを持った今回の審査委員が、幅広い価値観をベースにして、今の時点でそれなりのベストな判断をすればいいのではないかと思う。

【井上】 規則を逆手に取ったものを評価していこうという事？

【竹山】 いやいや、僕は井上さんほど天の邪鬼ではありませんよ（笑）。言いたいのは、これはマンションのつけ庇的なオーナメントではない、意味のあるファサードであれば評価したいという事。

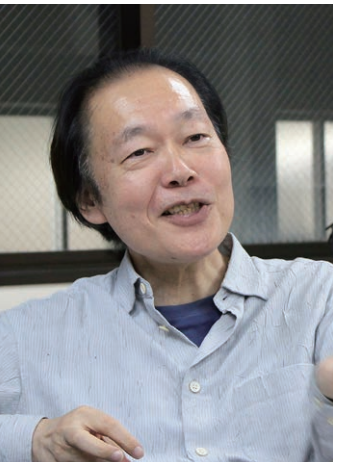
時代を通して一貫しない建築の評価の中でどう考えるか

【竹山】 僕と井上さんは同い年でね、僕らが学生の時「村野藤吾が良い」なんて言うとアホかと言われた。よく見ればなるほどなと思うけど、スパっと鋭いモダニズム建築の中にあって、村野藤吾のグニャグニャした建築は相当独特だった。それが今や、村野藤吾はある種のブランドになっている。村野建築は地面と建築の壁がヌルっとつながっている。藤森照信さんも建築を自然に溶け込ませたいので、人工物と自然物の境界を曖昧にするため地面と建物の境目はヌルっとなるという事を講演会でおしゃってました。こういったいわゆるモダニズム的ではないヌルっとした建築もインターナショナルなフィールドの中では多様性のある建築として受容されるようになってきた。これはこれで良いのではないかと。昔はコルビュジエやミースが好きでないとセンスが悪いと言われたが、今は多様になってきた。

【髙木】 永山さんは学生時代にどんな、または誰かの建築への憧れというのはありましたか？

【永山】 私が学生の時には、OMAやヘルツォーク&ド・ムーロンという人たちがいて、私はヘルツォークを鮮明に感じていました。ファサードで語るとか・・・。

【竹山】 ヘルツォークは、僕もわりと好きなんですけど、コープ・ヒンメルブラウのヴォルフ・プリックスは、ヘルツォークの建築は単なるパッケージデザインだと言ってました。空間を造っていないと。でも今は、パッケージデザインの時代なんです。批判ではなく、そういう時代なんだという事なんですね。



井上章一 氏

【髙木】 パッケージデザインと先ほど話題になったオーナメントもニアリーだと？

【竹山】 そう。ただし京都景観賞で市長賞となった数研出版もパッケージだけど凄いアイデアがある。京都のセットバックの景観規制を逆手にとって、見事でクリエイティヴなパッケージデザインを提案した。原広司さんが、だいぶん前に、コンペなどの状況を嘆いて「最近はパッケージしか作らせてもらえない。床と外壁があればいい、機能的な提案や空間の構想は邪魔だ、あとで自由に間仕切りを変えられれば良い、と言う時代の要請がある」という様な事を言われていた。

【髙橋】 時代が求めるパッケージデザインの建築と、冒頭の無意味とも思える側面のある景観規制の話は若干リンクすると思うのですが、こういった時代の中で、どういった建築が出てくる事に期待しますか？

【竹山】 結局、一般論では語れないのが建築。パラディオやアルベルティは彼らの考える近未来の一番純粋な建築を造って本を書いた。建築史は過去の建築を語るもの、建築論は未来の建築を語るものです。今の日本にはコンテクストが無い都市ばかり、京都にはまだある所にはある。コンテクストに応答しながら、未来のコンテクストを生み出す契機となるような建築が出てくるといいでしょうね。

永山祐子 氏

（後半は、次号に掲載）

第7回

京都建築賞に向けて

意見交換会
後　編

■審査委員

委員長　竹山　聖（京都大学 教授）

井上章一
（国際日本文化研究センター　教授）

永山祐子（永山祐子建築設計 主宰）

■顕彰制度特別委員会

髙木伸人・髙橋　勝・橋本政樹

原　利行・佐久間譲・藤原　出

第７回となる京都建築賞に向けて、去る9月19日に新たな審査委員と意見交換を行った。その後編をお届けします。

前回の意見交換会は11月号に掲載しております。

コンテクストについて

【井上】そのコンテクストって言った時に、京都のコンテクストをどう捉えてきてるかって言うところはどう考えるべきでしょうか？

【竹山】でも、それね、時代によって政治体制が違うから、今はやっぱりある程度凡庸な建物しか建たない時代でね、皆で考えるわけだから。もう、権力者がいたときって、ファシズムもそうだけど、大権力者がいたときに偉大な建築ってできるのであって、だから歴史上、例えばパラディオに教会を頼んだ人とか、ものすごい大金持ちがぽーんとパラッツォ作ったり、京都でも相国寺の七重の塔とか。それが後になって観光名所になるんですよ。今まで、大権力者なくして出来た名所というのは、あんまりないんですよね。だから、京都も大権力者がいた時は、どーんと、その大義的な、あっというものができたはずですけど、今はそういうのを潰す方向にありますよね。皆で考えれば、国立競技場だってできないんですよ。だから、パッケージデザインするしかなくなるわけ。きれいにカモフラージュして。

竹山　聖 氏

【髙木】永山さんから見て、東京には先ほどコンテクストがないっていう話でしたが、東京での建築と、やっぱり京都での建築は違う？コンテクストがあるってことを前提にした時には、やっぱり構えてしまう？

【永山】やっぱり、景観が凄く難しいっていうのもありますしね・・・。

【髙木】でもそれは所謂ルールの問題ですよね？

【永山】ええ、ルールの問題ですね。ルイ・ヴィトンの敷地は四条のアーケードがかかるところで、ここにルイ・ヴィトンか・・・とは思ったんですけど。

世界中のルイヴィトンの店舗は通常、視認性の良いような一番条件の良いところに作るんですけど、ある意味で言えばルイ・ヴィトンのお店の中でも初めてではないかと思うくらいこんなに条件の悪い、引きがない、アーケードで分断されている、そんな場所に作るとなり、正直大変だな～というのが第一印象でした。

でもなんかその時に思ったのは、完成したグラフィカルなファサードとして表現されている世界中のルイ・ヴィトンとは違う、京都らしい、建物の前を行き交う人にシーケンシャルに見えてくるものにしようと。見る場所によって違う風景に見えるように、たとえば、道の対岸を歩いている人と、建物沿いのアーケード下を歩いている人で違う認識のされ方をするなど。それを現象的な表現、ここでは光学フィルムによる現象によって生まれる縦格子によって作ろうと考えました。そうすることで、この難しいシチュエーションも肯定的に捉えられるかなと思いました。

【竹山】コンテクストを尊重するかどうかは別にして、「あっ！」て言う魅力的な建物を作れば周りが変わってきますよ。で、京都でも同じだと思う。東京でも、いろいろ周りを読みながら、今後ここのコンテクストの拠点になるようなものを作ろうと思ってます。「都市に楔を打つ」って言っているんですけどね。

そうするとね、これは本当に狙ったわけじゃないんですけど、真っ白でちょっと結晶体みたいな小さな住宅を作ったわけ。それができて10年以上たっていて、周りにね、よく似た感じのものができていくんですよ。なんか、それがいいと思ったんでしょうね。周りの人がね。プレハブ住宅じゃなくなっていった。

やっぱり、ゼロベースで考えるところもあるだろうし、大草原の中とか、それから、周りにちょこちょこあって気に食わない時もありますよね。僕は建築って、あまり一般論で語れないんじゃないかと思っている。

【髙木】「京都」と一括りにするけど、多様ですしね。それから、京都府下となると、京都市内の洛中みたいな話じゃもうないわけですからね。京阪奈学研都市のようなところもあるわけですからね。

【竹山】こないだ大阪府の建築士会の講演会がって、そこのコーディネーターやってるのが、京都出身の女性建築家で、「あ、京都なんですか、出身は」って言ったら「いや・・・」って言って一瞬怯んで、「宇治なんですよ」って（笑）。絶対、井上章一読みまくってるなって。やっぱり、教育効果が著しいね。

永山祐子 氏

【井上】いや、教育効果ちゃうねん。そういう町やねん、そもそもが。

【髙木】どう思われます?今の話は?

【竹山】読んでるでしょ?井上さんのやつ。

【髙橋】「京都ぎらい」の最初だけしかまだ読んでないんですが、洛中にお住まいの方の中華思想っていうのが鼻に付くっていうイメージの内容だったのかなと思うんですけど、京都建築賞っていう名前自体が、何かこう、そういうものを匂わす様な、別のオーラというか、雰囲気を醸していて、それがいけ好かないと感じてらっしゃるんじゃないかなと。

【井上】そんなことは感じていませんよ。

【永山】でも、伏見・宇治も応募していいんですよね?

【髙木】もちろん。あの、京都っていうことを、表面的にとらえると今みたいな話になっちゃんうんです。でも違うよって。その、ずっと積み重ね、積み重ね、積み重ねてきて今があるという中、そういう具現された場所としての京都という捉え方をして欲しいという意味合いで・・・。

【竹山】今のはだから笑い話でね、京都であっても、東京でもありますよね。青山か、江戸川区か、それから大阪にもあるわけ。それは内部の人のネタなのね。で、関東で、栃木が、埼玉なんか・・・だったり、それも内部のネタで、それはどんな場所でも、フィレンツェでもあるし、パリでもあるし、もう、どこでもある。でも京都は、京都という町が日本中に知られていて、世界中に知られているから、自意識過剰なんですよ。内部に住んでる人がね。だから今みたいな発言が出てくる。だから、それは良いことなんですよ。やっぱりプライドがあるって、自意識過剰っていうのはプライドがあることだから。フィレンツェの人も、もの凄いですよ。

【井上】僕は、イタリアで凄いなと思うのはね、イタリア全土を周ったわけじゃないけど、フランス料理の店ってまずないやん。ロンバルディアの人にとっては、トスカーナ料理が外国料理やん。中華は結構あるよ、そりゃ、中国人のいるエリアとか。でも、フレンチの店見たことないもん。やっぱり、フランス料理は田舎者の劣った料理って風に、イタリア人たちは考えているので、そういう目から見たら、世界中の料理がそろってる日本の町って、どんなふうに彼らは思うんやろ。

【髙木】だから、自意識過剰にならざるを得ないというところですかね?面白いですよね、そこらへんも。

京都建築賞の応募にどんなものが出てきて欲しいか?

【井上】竹山さんをうならせるオーナメントが出てきたら、これは相当な強者だと思う。オーナメントに見えるけれども、ここまで迫力があるのか!というのも良い。オーナメントだから良くないと言ってしまってもいいけれど、審査員が否定したがっているもので、納得させるというのは素晴らしいエントリーと言える。

【永山】これまでに受賞したものの一覧を見ていたのですが、去年はJINSが受賞していて、所謂建築ではないというところが私としては新鮮だなと思いました。

ただJINSの中にも京都のコンテクストとか状況との関係の結び方が含まれていて、そういったものを意識した提案となっているのではないかと感じました。表面的な京都らしさではなく本質的な京都らしさというものを新しい形で表現するとそれが選ばれるのではないかと思います。

なので、これが新しい京都らしさだというのが見えてくると、賞としてもちょっと特色が出てくるのかなと思います。

【竹山】日本の人口は頭打ちにあって、今後大きな政策転換が無い限りは、緩やかな成熟社会へとなっていく。ヨーロッパはとっくにそうなっている。そういう時代に京都はダウンサイジングをして景観として功を奏した。

その教訓を21世紀の初めに日本中が知った。これからはどんどん建物を建てていっても人がいない、活動がないということに気付いて、そうして京都は一周遅れのトップランナーとなった。

大きな戦災を免れたが、経済力がそこまでなかったことなどから古い建物、町並みを更新できなかった。また、みんながそれを制限したので、成熟の方向へ向かい、結果的にみんなが愛する街並となった。そういった中で京都は、独特のスケール感を持つ街になった。

パリがモンパルナスタワー以降、周辺にだけ超高層を建てて100年遅れのトップランナーになったように、人口が減っていき、成熟社会となっていく中で、どういうモデルができるかというのを想定しながら見ていく事になるのでしょう。

井上章一 氏

永山祐子　Yuko Nagayama

1975年東京生まれ。
昭和女子大学生活美学科卒後、青木淳建築計画事務所勤務。
2002年永山祐子建築設計設立、現在に至る。
「丘のあるいえ」AR Awards (UK) 優秀賞(2006)、
「豊島横尾館」JIA新人賞 (2014)、
「女神の森セントラルガーデン」東京建築賞優秀賞 (2018)、ほかを受賞。
「LOUIS VUITTON京都大丸店」、「ANTEPRIMA」、「カヤバ珈琲」、「SISII」、「木屋旅館」、「渋谷西武AB館5F」なども手掛け、「2020年ドバイ国際博覧会」日本館出展に係る建築家に採択されている。

井上章一　Shoichi Inoue

1955年京都府生まれ。
京都大学工学部建築学科卒後、同学大学院に進み工学研究科建築学専攻修士課程修了。
京都大学人文学研究所、国際日本文化研究所で研究職を歴任し、現在に至る。
『つくられた桂離宮神話』サントリー学芸賞、『南蛮幻想―ユリシーズ伝説と安土城』芸術選奨文部大臣賞を受賞。
『法隆寺への精神史』『伊勢神宮』『京都ぎらい』『現代の建築家』『美人論』など専門の建築史・意匠論のほか、風俗、近代日本文化史など、幅広いジャンルにわたって多数の著書がある。

竹山　聖　Kiyoshi Sey TAKEYAMA

1954年大阪生まれ。
京都大学卒後、東京大学大学院に進み、博士課程 (工学) 修了。
大学院在学中に設計組織アモルフ創設。
「強羅花壇」、「OXY乃木坂」、「TERRAZZA青山」などを手掛ける。
アンドレア・パラディオ賞入選 (1991)、台湾高雄オペラハウスコンペ3位入賞、2014年度情報文化学会賞芸術大賞、2016年日本建築学会教育賞 (教育貢献)、2017年科学技術分野の文部科学大臣表彰／科学技術賞／理解増進部門。
『独身者の住まい』『ぼんやり空でも眺めてみようか』などの著書がある。